

Ⅱ 委員会活動から Ⅱ

事業委員会(日本技術士会北海道支部)

(社)日本技術士会北海道支部「技術フォーラム」報告

去る2月27日(木)、札幌ガーデンパレスを会場に(社)日本技術士会北海道支部による「技術フォーラム」が121名の参加者を得て開催された。

このフォーラムは北海道支部が技術士会の会員向けに運営するCPD事業の一環で、会員の自由な意見交換の場として企画されたものであり、昨年度に引き続き2回目の開催となる。

当日は大島副支部長(当時)の開会挨拶に続き、北海道技術士センターの2つの研究会(分科会)の活動紹介および会員の技術課題を題材にした4件の「一般課題」と、「道南技術士協議会のCPD対応について」と題する「特別講演」が行われた。

休憩をはさんで後半は「特別課題」として「技術者倫理・事例研究～そのときあなたならどうする～」と題して、能登技術検討委員会委員長の司会により熱のこもった討論が行われた。

引き続き行われた「交流会」の場でも倫理事例についての話題で大いに盛り上がり、第2回目の「技術フォーラム」は盛会のうちに終了した。



大島副支部長(当時)の開会挨拶

【一般課題】

①『技術士の社会参加としての教育実践』(リージョナルステート研究会自然科学教育分科会活動報告)

五十嵐敏彦会員(建設・応用理学部門)

「社会に役立つ技術士を目指している」という基本的な考え方のもとに活動を展開しているリージョナルステート研究会自然科学教育分科会の活動が紹介されたが、長い目で人材の芽を育てるための地道な活動として各学校での子供たちとの交流の様子が注目を集めた。知識を伝えるのではなく、「面白い」ということを子供たちに伝えたいという言葉が印象的であった。また出席者に対して、分科会のサポーターとしての参加の呼びかけも行われた。

②『環境に配慮した新しい沿岸防災対策』(北方海域技術研究会沿岸防災対策分科会活動報告)

林 克恭会員(建設・水産・総合技術監理部門)

「環境に配慮した新しい沿岸防災対策の確立」を目的とし、具体的な計画手法・整備手法等のガイドラインを検討していることが報告された。

従来型の沿岸防災対策の課題、海岸環境における「生態系」や「保全」、また砂浜の積極的な活用と生態系保全目標の導入といった新しい沿岸防災対策の概念の提案など、海岸の環境保全の考え方が示された。さらに、次世代に継承すべき海岸は？ といった課題も提起された。

③『先人の業に学ぶ～産業土木遺産の考察から』

畑山 義人会員(建設部門)

近年の廃線跡や旧道をめぐる旅のブーム、産業考古学、土木史研究、地域の歴史的・文化資産としての認識、保存活動など古い土木施設に対する認識が高まってきている。それはそれで素晴らしいことではあるが、根源的には過去の蓄積を正しく理解し、それを継承することが土木技術者の使命であることが強調された。設計技術は進歩したが文化形成に貢献しているか、という言葉が印象的であった。

④『地球温暖化問題に環境保全対策を提供』

工藤 昇会員（建設部門）

地球温暖化問題が深刻化し、生命・健康・生活に対する悪影響が懸念されている。地球温暖化への着実な進行の現状等、海面上昇の深刻性等が示され、それらに対抗する軟弱地盤対策工法、海岸護岸工法などのほか、健康・地域活性化などについての内容の発表があった。



休憩時間にも RS 研究会自然科学教育分科会のサポーター参加の呼びかけが行われた

【特別報告】

『道南技術士協議会の CPD 対応について』

船山 明彦会員（水道部門）

北海道技術士センターの地方連絡協議会である道南技術士連絡協議会が、地方組織のハンディを背負った中で積極的に活動している状況が報告された。

道南技術士協議会は技術士 25 名、技術士補 7 名で構成されている。報告では、講演会や研修会等の中央集中というハンディの中で、人数が少ないことによる機動力や組織の一体化が容易であることなどのメリットを生かして、幹事会の開催や 5 回の勉強会の模様などの活発な活動が紹介された。

今後の課題として、企画のネタ切れ、会費徴収に伴う出席者の減少、中央組織との人的交流などがあ

げられたが、地道な CPD 活動の継続、他業界・異業種組織との連携などにより、地方組織なりの地域への貢献ができる地域密着型技術士、ひいては技術士の知名度の向上に向けての決意が示された。

地方在住技術士の CPD 活動の限界についての話題が高まっていることから、会場では頑張っているなという感激の声や、やればできるという気概を持つことの重要性が指摘され、盛んにエールが送られた。

【特別課題】

『技術者倫理・事例研究～そのときあなたならどうする～』

事前に表示されていた 2 つの倫理事例について「自分ならこうする」という観点から出席者が意見を述べた。

事例に入る前に司会の能登委員長から、

- ・人それぞれ価値観が違っており、お互いに価値観の相違を認め不一致がありうることを認識する。
- ・技術士は、被用者であっても専門能力を持ち自律的な判断能力のある個人として存在する。
- ・社会に出て長い時間がたつとモラルの意識が低下する傾向がある。

などの前置きがあり、引き続き具体的な倫理事例について議論が交わされた。



能登委員長の司会による「特別課題」

<倫理事例 1>

技術者（土木屋）としての立場、人間として公衆の安全・健康・福利を最優先する立場、また公務員としてとった手段について、など各個人が考えた立

場の違いによって意見が大きく分かれ、まさに倫理問題の難しさを象徴するような議論が続いた。極論すれば「倫理とは何なの？」とまで考えさせられるような内容であった。



熱のこもった「特別課題」討論の様子

〈倫理事例 2〉

技術者として、上司の管理職として、のいずれの立場においても、技術屋として「事実を公にする」という意見がかなりを占めた。これは技術者の良心なのか、それとも会社のリスク回避を考えたものなのか。出席者に企業内技術士が多く、なおかつある程度責任のある立場にいる人間が多いことなどを考えると、後者の比重が重いという印象であった。

今回の「技術フォーラム」は昨年に比べて参加者



「交流会」風景（倫理事例の話題で白熱）

が大幅に増え、特に特別課題では白熱した議論が交わされ、フォーラム終了後の交流会でも引き続きその話題で盛り上がった。それは、われわれ技術者がいつも遭遇する切実な問題（周りによくある事？）を題材にしたことや、事前に事例を周知し「あなたならどうする？」という問いかけの形式にしたことによるものと思われる。もちろん、ひとつの結論が出るようなものではないが、改めて倫理を扱うのは難しいと感じた。さまざまな意見が出た中で、能登委員長の「目の前にぶら下がらないと分からない」、「でも生活がかかっているからなあ」という言葉が妙に真実味を帯びずっしりと胸にこたえた。

（文責：横田 寛）